

平成21-23年度 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）  
分担研究報告書

『疾患および施設の種類のBPSDの実態に関する調査』

分担研究者 西川 隆 (大阪府立大学総合リハビリテーション学部)  
研究協力者 大西久男 (大阪府立大学総合リハビリテーション学部)  
大川直澄 (医療法人みどり会中村記念病院)  
中山博識 (社会福祉法人多伎の郷老人保健施設たき)  
田中寛之 (医療法人晴風園今井病院)  
植松正保 (医療法人晴風園今井病院)  
坂井麻里子 (済生会茨木病院リハビリテーション科)  
繁信和恵 (浅香山病院精神科)  
数井裕光 (大阪大学大学院医学系研究科精神医学)

研究要旨

2か所の介護老人保健施設（大阪府と島根県）、1病院の介護型療養病床（兵庫県）、1病院の回復期リハビリテーション病床（大阪府）の入所・入院者に関して、1ヶ月間に生じたBPSDの発生頻度と種類、原疾患、認知症重症度、介護負担度を調査し、疾患および施設の種類のBPSDの差異を検討した。

老健施設入所者の方が、療養病床および回復期リハ病床の入院患者より多くのBPSDを呈していた。老人保健施設におけるBPSDに対して重点的な対策を講じる必要がある。

原疾患との関連では、血管性認知症(VaD)はアルツハイマー病(AD)に比べて、妄想が少なく、多幸が多かった。ADL負担度はAD群が少なかった。しかし重症化した患者では、VaDはADに比して脱抑制が少なく睡眠障害が多い傾向が示唆されたのみで、明らかな差はみられなかった。

A. 研究目的

認知症については、病状の進行に伴うADLの低下とBPSDの出現に対する継続性のある治療・介護が必要であり、その時々段階に対応した医療・保健機関の連携が重要である。各患者の治療の見通しは、疾患の種類による病状進行の違いだけでなく、病院や施設の性格にもとづくADLやBPSDの許容度によって制約されることになる。

今回の研究の目的は、各種の病院・施設で対応されているBPSDの実態を明らかにし、認知症患者への円滑な治療連携の在り方を模索することである。

B. 研究方法

(1) 対象

下記4施設の入院・入所者292名（表1）。

- A 病院：回復期リハ病床（大阪府）  
B 老健：介護老人保健施設（大阪府）  
C 老健：介護老人保健施設（島根県）  
D 病院：介護療養型病床（兵庫県）

表1 対象

	人数 (男/女)	年齢
A病院	61 (33/28)	69.7±15.0
B老健	99 (28/71)	84.3±9.0
C老健	50 (12/38)	86.7±7.4
D病院	82 (21/61)	69.7±15.0
計	292(94/198)	82.3±11.8

(2)方法

上記対象者に関し、性・年齢・神経学的症候・認知症重症度・認知機能・ADL、ならびに、BPSDの発生頻度・種類・重症度・介護負担度を調査した。BPSDの頻度、重症度、介護負担度はNPI-Q、ADLの介護負担度は兵庫脳研式ADLスケール、認知症の重症度はCDRを用い、主たる看護・介護者により最近1ヶ月間の状態を評価した。

(倫理面への配慮)

個人情報について厳重に管理し、データの解析は匿名化して行った。

C. 研究結果

(1) 施設別の原疾患の内訳

各施設対象者の原疾患の内訳を表2に示す。

表2 4施設の疾患の内訳

疾患	A病院	B老健	C老健	D病院	計
AD		16	11	57	85
VD	37	32	12	19	100
DLB			1	3	4
PD		1	1		2
Ort	18	21	12		51
others	5	29	13	3	50
計	61	99	50	82	292

AD:アルツハイマー病, VD:脳血管障害,  
DLB:レビー小体型認知症, PD:パーキンソン病  
Ort:整形外科疾患, others:その他

(2) 施設別の認知症重症度

各施設対象者の CDR 評定を表3に示す。

CDRの重症度は施設によって有意な差があり、A病院<C老健・B老健<D病院であった( $\chi^2$ 検定)。

表3 4施設の患者の認知症重症度

施設	CDR					合計
	0	0.5	1	2	3	
A	20	21	10	7	1	59
B	5	10	22	24	36	97
C	5	3	13	18	11	50
D			19	15	48	82
合計	30	34	64	64	96	288

欠損値 4

(3) 4施設の認知症重症度・BPSD・ADL

4施設の患者のうち CDR $\geq$ 1の認知症者はA病院18名、B老健82名、C老健42名、D病院82名、計224名であった。これらの患者を対象に施設間のCDR, NPI総点, NPI負担度, ADL負担度を比較した(図1)。

いずれも施設による有意な差を認めた(p<0.05; Kruskal Wallis 検定)。

それぞれの順位は以下のものであった。

CDR: A病院<C老健・B老健<D病院

NPI総点: A病院<D病院<B老健 $\leq$ C老健

NPI負担: A病院・D病院・B老健<C老健

ADL負担: D病院・B老健・A病院<C老健

(・は有意差なし,  $\leq$ は傾向差, <は有意差を示す。P<0.05; Mann-Whitney検定)

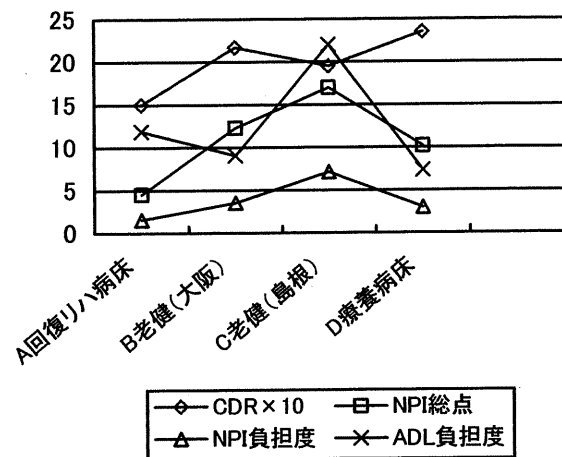


図1 4施設におけるCDR, BPSD, ADLの比較

(3) 4施設のBPSD各項目出現頻度

4施設 CDR $\geq$ 1の認知症者にみられた12種類のBPSDの項目の出現頻度を比較した(図2)。

興奮、うつ・不快、無為・無関心、易怒性の項目に施設間の有意差がみられた。B老健で興奮と易怒性が目立ち、C老健でうつ・不快と無為・無関心が目立った。また、BPSDの頻度と重症度を総合したNPI総点についてもBPSDの同じ項目で施設間の有意差を認められた。

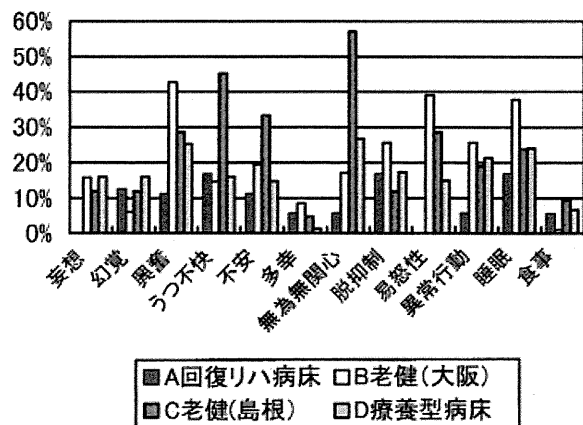


図 2 BPSD各項目の4施設の比較

#### (4) 認知症患者別の BPSD と ADL の比較

4施設の認知症患者 224名を原疾患別に AD 群 78名、VaD 群 62名、その他・不明群 77名の3群に分け、12種類の BPSD の項目の NPI 得点と NPI 総点、NPI 負担度、ADL 負担度を比較した。

妄想、不安、多幸、ADL 負担度に有意な群間差を認めた ( $p < 0.05$ ; Kruskal Wallis 検定)。妄想は VaD 群が他の2群より有意に少なく、不安はその他・不明群が他の2群より有意に多く、多幸は VaD 群がその他・不明群より有意に多かった。ADL 負担度は AD 群が他の2群より有意に少なかった。

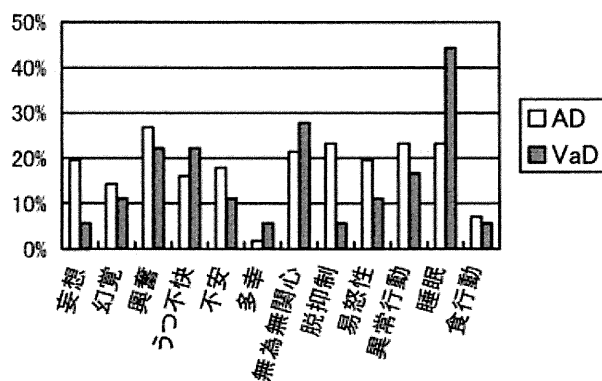
#### (5) 2病院における AD 群と VaD 群の比較

老健施設の入所者の多くは原疾患の診断が画像検査で裏付けられないため、全例に CT 検査を施行しえた C 病院の AD 患者 57名 (男 14、女 43) と VaD 患者 19名 (男 6、女 13) に絞って BPSD と ADL を比較した。BPSD 12項目の出現頻度を図 3 に示す。性・年齢の構成に差はなかった。

AD と VaD に多くみられた BPSD はそれぞれ順に、AD では、興奮、脱抑制、異常行動、睡眠、無為・無関心、妄想、VaD では、睡眠障害、無為・無関心、興奮、うつ・不快であった。両群の出現頻度の比較では、VaD は AD

に比べて、脱抑制 ( $p = 0.096$ ) が少なく、睡眠障害 ( $p = 0.082$ ) が多い傾向があった ( $\chi^2$  検定両側)。

なお、NPI 総点、NPI 負担度、ADL 負担度には両群で差を認めなかった。



#### D. 考察

##### (1) 施設の種類による患者の認知症重症度と BPSD の実態

回復期リハ病床、老健施設、介護型療養病床の順に、軽症から重症に移行する認知症患者を収容していた。これは施設の役割からも予想しうる結果といえる。しかし、施設で発生する BPSD の頻度・負担度、ADL の負担度は老健施設の方がむしろ大きく、医療の必要な患者が病院でなく保健施設での対応に委ねられているという実態を示唆している。中間施設での精神医療を重点的に強化する必要がある。

##### (2) AD と VaD における BPSD の特徴

AD と VaD における BPSD の種類に関しては、異なるという報告と、異なるないという報告がみられる。差異があるという報告では、AD に妄想が多く、VaD に抑うつが多いことなどが指摘されている。本研究の結果は、4施設をまとめてみた場合に、VaD に妄想が少ないことが示されたが、確実な診断の得られた療養病床における対象者では、VaD は AD に比べて脱抑制が少なく、睡眠障害が多い傾向が示唆されたのみであった。この結果は、療養病床に

においては BPSD が消褪する段階の重度認知症者が対象であること、サンプル数が少なかったことによると考えられる。

#### E. 研究発表

##### 1. 論文発表

- 1) 西川 隆, 大西久男: 認知症の原因疾患による心理・行動症状の特徴とケアの方針. *Journal of Rehabilitation and Health Sciences* 7(1): 1-8, 2009
- 2) 西川 隆: アルツハイマー病の臨床経過. *神経内科* 72(Suppl 6): 277-283, 2010
- 3) 西川 隆: 認知症疾患別の予後の見通しと本人への対応、家族への説明. *Cognition and Demntia* 9(1): 76-81, 2010
- 4) 中山博識, 大西久男, 西川 隆: 島根県の老健施設における認知症の周辺症状と介護負担の実態調査. *島根医学* 30(3): 39-46, 2010

##### 2. 学会発表

- 1) 大西久男, 田中宏明, 小島久典, 清水寿代, 大川直澄, 中山博識, 西川 隆: 認知症の疾患別 BPSD の実態調査とその対応法に関する

研究-老人保健施設およびリハビリテーション専門病院における調査より-. 第 25 回日本老年精神医学会, 2010

- 2) 大西久男, 田中宏明, 西川隆, 大川直澄, 中山博識: 認知症者の BPSD の出現と症状ごとの介護負担に関する研究 (第 26 回日本老年精神医学会, 2011)
- 3) 田中寛之, 植松正保, 西川隆: 重度認知症者の認知機能検査に関する研究; 重度認知症者のための新しい認知機能検査. (第 26 回日本老年精神医学会, 2011)
- 4) 坂井麻里子, 数井裕光, 繁信和恵, 西川隆: Alzheimer 型認知症患者における味覚機能の検討. (第 35 回日本高次脳機能障害学会, 2011)

#### F. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

認知機能が低下した高齢者とその家族を支援するための地域支援プログラムの開発と評価

研究分担者	河野あゆみ	大阪市立大学大学院看護学研究科
研究協力者	丸尾 智実	大阪市立大学大学院看護学研究科
	奥田 益弘	社会福祉法人 みささぎ会 藤井寺特別養護老人ホーム
	畑 八重子	社会福祉法人 みささぎ会 藤井寺特別養護老人ホーム
	桑田 直弥	社会福祉法人 みささぎ会 藤井寺特別養護老人ホーム

**研究要旨**

本研究は、認知機能が低下した高齢者とその家族を支援することを目的として地域支援プログラムの開発と評価に取り組んだ。初年度は、認知機能が低下した高齢者と家族を支援する地域づくりを目指し、地域住民を対象とした認知症の理解促進プログラムを実施して評価を行った。次年度は、初年度に実施した認知症の理解促進プログラムの長期効果と、その課題としてあがったプログラム評価に有用な指標の確立を目指し、国外で使用されている指標の日本語版を作成して有用性を検討した。最終年度は、認知機能が低下した高齢者に対応する家族介護者を地域で効果的に支援することを目指し、家族介護者を対象とした認知症介護の自己効力感向上プログラムを実施して評価を行った。3年間の成果から、認知機能が低下した高齢者のインフォーマル・サポートとなる地域住民や家族介護者への積極的な支援の重要性が示された。

**A. 研究目的**

本研究では、認知機能が低下した高齢者とその家族を住み慣れた地域で支援することを目的に、以下の研究に取り組んだ。

1. 50歳以上の地域住民を対象とした認知症の理解促進プログラム (PGM) を実施し評価する。
2. 国外で使用されているアルツハイマー病の知識スケール； Alzheimer Disease of Knowledge Scale (ADKS) と認知症介護の自己効力感； The Revised Scale for Caregiving Self-Efficacy (RSCSE) の日本語版の有用性を検討する。
3. 認知機能の低下した高齢者の家族介護者に認知症介護の自己効力感向上プログラム (SE向上PGM) を実施し評価する。

**B. 研究方法**

**1. 地域住民への認知症理解促進PGMの評価**

大阪府下の2市6地区で2～3ヶ月間に全3回の認知症の理解促進PGMを実施した。評価はプログラム実施前後の対象者の認知症のイメージや知識、BPSDの対応への自己効力感、認知症高齢者を地域で支えることに対する考え方の変化とした。分析対象者は全3回のPGMにすべて参加した106人（平均年齢69.9±6.9歳、女性78.3%）とし、さらに、長期効果の分析対象者は半年後

の調査に回答した31人（平均年齢70.1±7.0歳、女性77.4%）とした。

**2. ADKSとRSCSEの日本語版の検討**

各指標は逆翻訳と順翻訳を経て日本語版を作成し、項目分析ならびに内的整合性や弁別的妥当性の検討を行った。なお、「介護施設職員は家族介護者に比べ認知症の知識が多く、認知症介護の自己効力感が高い」という仮説を立てた。大阪府下の2介護保険施設職員95人（平均年齢34.5±11.7歳、女性65.3%）と家族介護者47人（平均年齢64.5±10.7歳、女性76.6%）の計142人に自記式質問紙調査を実施した。

**3. 家族への認知症介護SE向上PGMの評価**

PGMの構成は、認知症高齢者のBPSDと対応する家族の事例を作成した。研究デザインは比較対照試験であり、介入群・対照群の両群に行うPGM回数は3週間に1回、約2時間、全6回で、そのうち、介入群にはSE向上PGMを約1時間、全5回提供した。大阪府下の居宅介護支援事業所利用者の家族、介入群19人（平均年齢64.5±9.9歳、平均介護期間4.2±4.7年）と対照群14人（平均年齢67.0±10.9歳、平均介護期間5.0±4.0年）の計33人を対象とし、RSCSE、ADKS、BPSDの出現と負担感(NPI-Q)、介護負担感(J-Zarit8)の自記式質問紙調査で評価した。また、PGM内の対象者の発言内容を質的に分析した。

## C. 研究結果

### 1. 地域住民への認知症理解促進PGMの評価

PGM 実施前後では、認知症のイメージの「認知症は『身近に感じられる』(p=.002)、『自分には関係ない』(p=.049)」、「認知症になるのは『恥ずかしい』(p<.001)、『悲しい』(p=.001)」、認知症の知識(p=.032)、BPSD の対応への自己効力感の「『暴言をはいたり暴行をしたりする』認知症高齢者に対応できる(p=.036)」、地域で支えることに対する考え方の「認知症高齢者とその家族を自分の地域で支えることができると思う(p=.010)」で PGM 後に得点が有意に上昇した。半年後の変化では、認知症のイメージの「認知症になるのは恥ずかしい(p=.079)」と「認知症は身近に感じられる(p=.096)」、認知症の知識(p=.069)で PGM 前に比べ得点が上昇した。

### 2. 評価尺度ADKSとRSCSEの日本語版の検討

ADKS の全体の I-T 分析は  $r=-.2071\sim.4035$ 、内的整合性は  $\alpha =.59$  であったが、家族介護者のみの内的整合性は  $\alpha =.72$  であった。平均点は施設職員が家族介護者より高かったが有意ではなかった( $19.5\pm 3.1$  vs  $18.8\pm 3.9$ ,  $p=.301$ )。RSCSE の全体の I-T 分析は  $r=.5530\sim.8501$ 、内的整合性は 3 つの下位尺度(SE-OR;

SE-Obtaining Respite, SE-RDPB; SE-Responding to Disruptive Patient Behaviors, SE-CUT; SE-Controlling Upsetting Thoughts)で  $\alpha =.86\sim.92$ 、因子分析では原尺度と同じ因子構造を確認した。平均点は施設職員と家族介護者で差はなかった(SE-OR;  $48.8\pm 21.8$  vs  $49.5\pm 31.6$ ,  $p=.896$ , SE-RDPB;  $54.3\pm 21.3$  vs  $50.9\pm 27.1$ ,  $p=.439$ , SE-CUT;  $54.5\pm 17.5$  vs  $51.2\pm 22.2$ ,  $p=.409$ )。

### 3. 家族への認知症介護SE向上PGMの評価

対象者の特性では、介入群は女性が多く( $94.7\%$  vs  $64.3\%$ ,  $p=.025$ )、仕事をしている人が多かった( $52.6\%$  vs  $0.0\%$ ,  $p=.001$ )。PGM 評価では、NPI-Q の負担感で、対照群は PGM 実施前後で得点の変化がほとんどみられなかったが(前; $18.6\pm 10.4$ , 後; $18.4\pm 8.0$ )、介入群は実施後に負担感が増加していた(前; $11.0\pm 10.4$ , 後; $18.7\pm 4.8$ )( $p=.066$ )。また、認知症の知識では、両群ともに PGM 後に得点が上昇していた(介入群: 前; $14.9\pm 3.8$ , 後;  $19.8\pm 3.8$ , 対照群:  $16.9\pm 2.3$ , 後;  $20.0\pm 3.6$ ,  $p=.185$ )。しかし、発言内容では、介入群に「他者の意見を参考にする」発言が、対照群に「自分のやり方を貫く」発言が多かった。

## D. 考察

### 1. 地域住民への認知症理解促進PGMの評価

PGM の実施により地域住民の認知症の否定的なイメージが改善し認知症を身近な問題として捉える可能性が考えられ、地域住民に認知症の理解を促進する重要性が示された。

### 2. 評価尺度ADKSとRSCSEの日本語版の検討

ADKSとRSCSEの日本語版の使用可能性が示唆されたが、日本語の再考や妥当性で更なる検討の必要性が示された。

### 3. 家族への認知症介護SE向上PGMの評価

介入群と対照群の背景の違いも含めアウトカムに影響を与えた要因や長期的な効果について更なる検証を行い、持続可能で効果的な家族支援について検討する必要がある。

## E. 結論

以上の結果より、認知機能が低下した高齢者のインフォーマル・サポートとなる地域住民や家族介護者への積極的な支援と評価の必要性が示された。地域住民や家族介護者が認知症を適切に理解することは、認知症高齢者が地域で安心して生活を継続できるために重要な事項であると考える。今後も効果的で持続的なPGMを検討する必要性が示された。

## F.健康危険情報 なし

## G.研究発表<学会発表>

1)丸尾智実、河野あゆみ:地域で認知症高齢者を支えることを目的とした認知症啓発プログラムの効果—認知症の人との関わりの経験の有無による効果の検討—, 第 52 回日本老年社会科学学会, 2010/6/17-18: 愛知。

2)丸尾智実、河野あゆみ:地域住民に対する認知症高齢者を理解するための啓発プログラムへの参加要因の検討, 第 69 回日本公衆衛生学会, 2010/10/27-29: 東京。

3)Satomi Maruo, Ayumi Kono: Effect of Community Supportive Care Program for Maintaining Daily Lives of Elders with Dementia, The Gerontological Society of America 63rd Annual Scientific Meeting, 2010/11/19-23: New Orleans(U.S.A.)。

4)丸尾智実、河野あゆみ:地域住民に対する認知症高齢者を理解するための啓発プログラムの評価;参加者の発言の内容分析による検討, 第 30 回日本看護科学学会, 2010/12/3-4: 札幌。

5)Satomi Maruo, Ayumi Kono: The Revised Scale for Caregiver Self-Efficacy in Japanese Version : Reliability and Validity Studies. The 2nd Japan-Korea Joint Conference Community Health Nursing. Kobe. 2011.7

## H.知的財産権の出願・登録状況 なし



### Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

1. 平成 21 年度 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
遠藤英俊	Ⅲ法的知識 F.高齢者介護に関する 法と施設	山内俊雄	精神科専門医のための プラクティカル精神医学	中山書店	東京都	2009	661-670
遠藤英俊	介護保険	小川聡	改訂第7版内科学書 vol.1	中山書店	東京都	2009	265-271
遠藤英俊	第8章精神 科医療 8-2-5認知症	精神保健福祉 社白書編集 委員会	精神保健福祉白書2 010年版	中央法規 出版株式 会社	東京都	2009	139-139
井関栄三, 村山憲男	レビー小体 型認知症	浦上克哉	老年医学の基礎と 臨床Ⅱ	ワールド プランニ ング	東京	2009	274-281

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Kazui H, Ishii R, Yoshida T, Ikezawa K, Takaya M, Tokunaga H, Tanaka T, Takeda M.	Neuroimaging studies in patients with Charles Bonnet Syndrome.ー	Psychogeriatrics	9	77-84	2009
数井裕光、武田雅俊	認知症に対する神経心 理学的研究ー阪大精 神科の研究を中心にー 特別企画 認知症研究 への貢献と到達点ー 西村健先生を偲んでー	Cognition and Dementia	8(4)	109-111	2009
数井裕光、武田雅俊	認知症の BPSD を考 える ; AD, DLB, FTD を中心に ーBPSD と関連する脳障害 部位ー	老年精神医学	20 増刊号 I	128-133	2009
梅本充子、遠藤英俊、三 浦久幸	認知症高齢者における 行動観察評価スケール NOSGER の検討 (第 1 報) ー信頼性の検討ー	老年精神医学 雑誌	20(10)	1139-1148	2009



遠藤英俊、三浦久幸	高齢者診療マニュアル 後期高齢者医療（長寿医療）制度	日本医師会雑誌 第138巻・特別号（2）	138(2)	318-319	2009
三浦久幸、中島一光、遠藤英俊	7. 高齢者終末期医療・ケアの国際比較	Geriatric Medicine（老年医学）4月号	47(4)	487-491	2009
飯島節、遠藤英俊、百瀬由美子、井口昭久	座談会・高齢者の終末期をめぐる諸問題	Geriatric Medicine（老年医学）4月号	47(4)	509-521	2009
Yukiko Tanaka, Kumiko Nagata, Tomoe Tanaka, Koichi Kuwano, Hidetoshi Endo, Tetsuya Otani, Minato Nakazawa, Hiroshi Koyama	Can an individualized and comprehensive care strategy improve urinary incontinence (UI) among nursing home residents?	Arch Gerontol Geriatr	49(2)	278-283	2009
石附 敬、和気純子、遠藤英俊	重度要介護高齢者の在宅生活の長期継続に関連する要因	老年社会科学	31(3)	359-365	2009
藤城弘樹、村山憲男、井関栄三	レビー小体病としてのレビー小体型認知症	精神科治療学	24	1357-64	200
藤城弘樹、井関栄三	DLB と PDD は同じ病気か？違う病気か？違う病気である。	Clinical Neuroscience	印刷中	印刷中	2010
Iseki E, Murayama N, Yamamoto R, Fuji Shiro H, Suzuki M, Kawano M, Miki S, Sato K	Construction of a <sup>18</sup> F-FDG PET normative database of Japanese Healthy elderly subjects and its application to demented and mild cognitive impairment patients.	Int J Geriatr Psychiatry	印刷中	印刷中	2010

Murayama N, Iseki E, Endo T, et al	Risk factors for delusion of theft in patients with Alzheimer's disease showing mild dementia in Japan	Aging & Mental Health	13	563-568	2009
Kamagata E, Kudo T, Kimura R, Tanimukai H, Morihara T, Sadik MG, Kamino K, Takeda M.	Decrease of dynamin 2 Levels in late-onset Alzheimer's disease Alters Abeta metabolism,	Biochem Biophys Res Commun	379	691-695	2009
森原剛史, 武田雅俊	「初老期発症と高齢発症アルツハイマー病の異同: 分子生物学の立場から」	Cognition and Dementia	第8巻 第2号	134-137	2009
森原剛史, 武田雅俊	「Alzheimer 病の遺伝子研究 これまでの成果とこれからの課題」	医学の歩み	第229巻 第3号	205-210	2009
森原剛史, 林紀行, 横小路美貴子, 数井裕光, 紙野晃人, 武田雅俊	「アルツハイマー病の遺伝子研究」		第38巻 第8号	1007-1014	2009
田伏薫, 繁信和恵	認知症疾患治療病棟における転倒・転落の原因と対策	総合病院精神医学	21-3	(印刷中)	2009
akaoka, A., Suto, S., Makimoto, K., Yamakawa, M., Shigenobu, K., Tabushi, K.	Pacing and lapping movements among institutionalized patients with dementia.	<i>the American Journal of Alzheimers Disease &amp; Other Dementias</i>	accepted for publication, October,	In press	2009
繁信和恵, 池田学	認知症1行動療法的アプローチ・環境調整	精神科治療学	23巻増刊号	233-235	2009
繁信和恵, 池田学	FTLD 患者への対応	BRAIN and NERVE	61	1337-1342	2009
澤 温	長期入院を防ぐための精神科救急医療サービス	精神科臨床サービス	第9巻3号	385-389	2009
澤 温	精神科救急医が目指すもの	精神科救急	12	45-48	2009

澤 温	危機介入と精神科救急	精神科救急	印刷中		
澤 温	大阪市の精神科救急を含めた地域医療～小規模精神科救急病院から見えたもの～	病院・地域精神医学	印刷中		
西川 隆, 大西久男	認知症の原因疾患による症状・行動の特徴とケアの方針	Journal of Rehabilitation And Health Sciences	7(1)	1-7	2009
西川 隆	認知症疾患別の予後の見通しと本人への対応、家族への援助	Cognition and Dementia	9(1)	76-81	2010
西川 隆	アルツハイマー病症状と臨床経過	神経内科	72(Suppl. 6)	277-283	2010
Ayumi Kono, et al	Preventive home visit model targeted to specific care needs of ambulatory frail elders	Aging Clinical & Experimental Research	21(2)	167-173	2009
河野あゆみ 他	大都市住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題	日本公衆衛生雑誌	56(9)	662-673	2009
河野あゆみ 他	虚弱高齢者に対する転倒予防教室の効果	保健師ジャーナル	65(12)	1036-1041	2009

1. 平成 22 年度 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
数井裕光	第 X I V 章精神の症状・徴候と疾患 2 精神疾患、H 正常圧水頭症	松田 暉、萩原俊男、難波光義、鈴木久美、林直子	看護学テキスト NICE 疾病と治療 I I I	南江堂	東京	2010	247-249
武田雅俊、数井裕光	I I I 精神疾患における前頭葉の構造と機能 1 認知症	福田正人、鹿島晴雄	専門医のための精神科リユミエール 21 前頭葉でわかる精神疾患の臨床	中山書店	東京	2010	92-100
数井裕光	その他の認知症	大内尉義、秋山弘子	新老年学第3版	東京大学出版	東京	2010	1216-1224
数井裕光、武田雅俊	代表的疾患 5. 特発性正常圧水頭症	三村 将	新しい診断と治療の A B C 6 6 認知症	最新医学社	大阪	2010	107-115
遠藤英俊		遠藤英俊	高齢者への服薬指導 Q&A	医薬ジャーナル社	大阪	2010	203頁
遠藤英俊	9-2-5 認知症 第9章 精神科医療	精神保健福祉社白書編集委員会	精神保健福祉社白書 2011 年版 岐路に立つ精神保健医療福祉 - 新たな構築をめざして	中央法規出版		2010	217頁
澤 温	精神科救急	精神保健福祉社白書編集委員会	精神保健福祉社白書 2011 年度版	中央出版	名古屋	2010	138
河野あゆみ	地域看護活動と科学的根拠	横山美江	よくわかる地域看護研究の進め方・まとめ方	医歯薬出版	東京	2010	112-137
河野あゆみ	閉じこもり	鳥羽研二	高齢者の生活機能の総合的評価	新興医学出版社	東京	2010	127-131

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Kazui H, Yoshida T, Takaya M, Sugiyama H, Yamamoto D, Kito Y, Wada T, Nomura K, Yasuda Y, Nomura K, Yamamori H, Ohi K, Fukumoto M, Iike N, Iwase M, Morihara T, Tagami S, Shimosegawa E, Hatazawa J, Ikeda Y, Uchida E, Tanaka T, Kudo T, Hashimoto R, Takeda M.	Different characteristics of cognitive impairment in elderly schizophrenic and Alzheimer's disease in the mild cognitive impairment stage.	Dement Geriatr Cogn Disord		20	2011
Yoshida T, Kazui H, Tokunaga H, Kito Y, Kubo Y, Kimura N, Morihara T, Shimosegawa E, Hatazawa J, Takeda M.	Protein synthesis in the posterior cingulate cortex in Alzheimer's disease.	Psychogeriatrics	11	40-45	2011
Takaya M, Kazui H, Tokunaga H, Yoshida T, Kito Y, Wada T,	Global cerebral hypoperfusion in preclinical stage of idiopathic normal pressure	J Neurol Sci	298	35-41	2010
Ishii R, Canuet L, Kurimoto R, Ikezawa K, Aoki Y, Azechi M, Takahashi H, Nakahachi T, Iwase M, Kazui H, Takeda M.	Frontal shift of posterior alpha activity is correlated with cognitive impairment in early Alzheimer's disease: a magnetoencephalography-beamformer study.	Psychogeriatrics	10	138-143	2010

Hashimoto R, Ohi K, Yasuda Y, Fukumoto M, Iwase M, Iike N, Azechi M, Ikezawa K, Takaya M, Takahashi H, Yamamori H, Okochi T, Tanimukai H, Tagami S, Morihara T, Okochi M, Tanaka T, Kudo T, Kazui H, Iwata N, Takeda M.	The impact of a genome-wide supported psychosis variant in the ZNF804A gene on memory function in schizophrenia.	Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet.	153B	1459-1464	2010
Takahashi H, Iwase M, Canuet L, Yasuda Y, Ohi K, Fukumoto M, Iike N, Nakahachi T, Ikezawa K, Azechi M, Kurimoto R, Ishii R, Yoshida T, Kazui H, Hashimoto R, Takeda M.	Relationship between prepulse inhibition of acoustic startle response and schizotypy in healthy Japanese subjects.	Psychophysiology	47	831-837	2010
Azechi M, Iwase M, Ikezawa K, Takahashi H, Canuet L, Kurimoto R, Nakahachi T, Ishii R, Fukumoto M.	Discriminant analysis in schizophrenia and healthy subjects using prefrontal activation during frontal lobe tasks: A near-infrared spectroscopy.	Schizophrenia Research	117	52-60	2010



遠藤英俊、三浦久幸	社会的・制度的支援と家族介護 1) 介護保険	神経内科	72(Suppl.6)	217-221	2010
遠藤英俊	「わが旅」ジャマイカへの旅	日本医師会雑誌	139(4)		2010
遠藤英俊、佐竹昭介、洪英在、田代真耶子、三浦久幸、近藤真由	認知症の新しい治療 2. 音楽療法	内科系総合雑誌 モダンフイジシャン	30(9)	1169-1172	2010
藤城弘樹、井関栄三	高齢者の幻覚妄想と病理学的背景	老年精神医学雑誌	21 巻 6 号	671-676	2010
藤城弘樹、井関栄三、村山憲男、笠貫浩史、太田一実、荒井平伊、佐藤潔	特発性レム睡眠行動障害の長期経過の後に、場所依存性に幻視が出現したレビー小体型認知症の1例	精神医学	53 巻 1 号	7-13	2011
Kimura R, Morihara T, Kudo T, Kamino K, Takeda M	Association between CAG repeat length in the <i>PPP2R2B</i> gene and Alzheimer disease in the Japanese population	Neuroscience letters	487	354-357	2011
Hayashi N, Kazui H, Kamino K, Tokunaga H, Takaya M, Yokokoji M, Kimura R, Kito Y, Wada T, Nomura K, Sugiyama H, Yamamoto D, Yoshida T, Antonio Currais, Salvador Soriano, Hamasaki T, Yamamoto M, Yasuda Y, Hashimoto R, Tanimukai H, Tagami S, Okochi M, Tanaka T, Kudo T, Morihara T, Takeda M	<i>KIBRA</i> Genetic Polymorphism Influences Episodic Memory in Alzheimer's Disease, but Does Not Show Association with Disease in a Japanese Cohort	Dementia and Geriatric Cognitive Disorders	30	302-308	2010

遠藤英俊、三浦久幸	社会的・制度的支援と家族介護 1) 介護保険	神経内科	72(Suppl.6)	217-221	2010
遠藤英俊	「わが旅」ジャマイカへの旅	日本医師会雑誌	139(4)		2010
遠藤英俊、佐竹昭介、洪英在、田代真耶子、三浦久幸、	認知症の新しい治療 2. 音楽療法	内科系総合雑誌 モダンフイジシャン	30(9)	1169-1172	2010
藤城弘樹、井関栄三	高齢者の幻覚妄想と病理学的背景	老年精神医学雑誌	21 巻 6 号	671-676	2010
藤城弘樹、井関栄三、村山憲男、笠貫浩史、太田一実、荒井平伊、佐藤潔	特発性レム睡眠行動障害の長期経過の後に、場所依存性に幻視が出現したレビー小体型認知症の1例	精神医学	53 巻 1 号	7-13	2011
Kimura R, Morihara T, Kudo T, Kamino K, Takeda M	Association between CAG repeat length in the <i>PPP2R2B</i> gene and Alzheimer disease in the Japanese population	Neuroscience letters	487	354-357	2011
Hayashi N, Kazui H, Kamino K, Tokunaga H, Takaya M, Yokokoji M, Kimura R, Kito Y, Wada T, Nomura K, Sugiyama H, Yamamoto D, Yoshida T, Antonio Currais, Salvador Soriano, Hamasaki T, Yamamoto M, Yasuda Y, Hashimoto R, Tanimukai H, Tagami S, Okochi M, Tanaka T, Kudo T, Morihara T, Takeda M	<i>KIBRA</i> Genetic Polymorphism Influences Episodic Memory in Alzheimer's Disease, but Does Not Show Association with Disease in a Japanese Cohort	Dementia and Geriatric Cognitive Disorders	30	302-308	2010

Ohi K, Hashimoto R, Yasuda Y, Yoshida T, Takahashi H, Iike N, Iwase M, Kamino K, Ishii R, Kazui K, Fukumoto M, Takamura H, Yamamori H, Azechi M, Ikezawa K, Tanimukai H, Tagami S, Morihara T, Okochi M, Yamada K, Numata S, Ikeda M, Tanaka T, Kudo T, Ueno I, Yoshikawa T, Ohmori T, Iwata N, Ozaki N, Takeda M.	The <i>chitinase 3-like</i> gene and schizophrenia: Evidence from a multi-center case-control study and meta-analysis	Schizophrenia Research	116	126-132	2010
森原剛史、林紀行、横小路美貴子、武田雅俊	連載 認知症臨床に役立つ生物学的精神医学 ②アルツハイマー病と遺伝要因	老年精神医学雑誌	第21巻第11号	1261-1270	2010
山川みやえ、中岡亜希子、繁信和恵、手寫大喜、西方志織、牧本清子、田伏薫	入院前後の活動リズムを IC タグモニタリングシステムにより比較した前頭側頭型認知症の1例	老年精神医学雑誌	21巻	695-701	2010
田伏薫	地域のなかの精神科医の役割	日本精神科病院協会雑誌	29巻	37-41	2010

繁信和恵	プライマリーケア医のための認知症治療How-to 第3回認知症ケアに必要な書類と専門医療機関紹介	Cognition and Dementia	Vol.9 No 3	252-258	2010
繁信和恵	行動療法的アプローチ・環境調整	精神科治療学	巻：24	233-235	2009
繁信和恵	頭側頭型認知症のBPSD	老年精神医学雑誌	21(8)	867-871	2010
澤温、平田豊明	日本精神科救急学会ガイドライン作成の経緯と現状	病院・地域精神医学	53-2	215-217	2010
澤 温	医療現場における抗精神病薬矯正投与の実情と問題点	臨床精神薬理	14-1	17-23	2010
澤 温	医療機関におけるアウトリーチ	精神科臨床サービス	11-1	37-41	2010
中山博識、大西久男、西川 隆	島根県内の老健施設における認知症の周辺症状と介護負担の実態調査	島根医学	30(3)	39-46	2010
河野あゆみ	高齢者の「閉じこもり」へのアプローチ;寝たきりを未然に防ぐために	日本未病システム学会雑誌	16(1)	95-99	2010
河野あゆみ	独居男性高齢者のための地域交流促進をめざしたグループワークにおけるプロセス	日本地域看護学会誌	12(2)	45-50	2010
藤田俱子、河野あゆみ他	介護保険サービス未利用の要支援認定高齢者を対象にした予防訪問プログラムの開発	保健師ジャーナル	66(10)	924-929	2010

1. 平成 23 年度 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
木藤友実 子、数井裕 光、武田雅	正常圧水頭症と精神症状	松下正明監修、栗田圭一編集	日常診療で出会う高齢者精神障害のみかた	中外医学社	東京	2011	241-246
吉山顕次、 数井裕光、 武田雅俊	幻覚と妄想	堀口 淳	脳とこころのプライマリケア	シナジー	東京	2011	405-409
数井裕光、 杉山博通、 板東潮子	認知症 知って安心、症状別対応ガイド	武田雅俊監修	認知症 知って安心、症状別対応ガイド	メディカルレビュー社	大阪	2012	全てのページ

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Kazui H, Yoshida T, Takaya M, Sugiyama H, Yamamoto D, Kito Y, Wada T, Nomura K, Yasuda Y, Yamamori H , Ohi K, Fukumoto M, Iike N, Iwase M, Moriyama T, Tagami S, Shimosegawa E, Hatazawa J, Ikeda Y, Uchida E, Tanaka T, Kudo T, Hashimoto R, Takeda M	Different characteristics of cognitive impairment in elderly schizophrenia and Alzheimer's disease in the mild cognitive impairment stage	Dement Geriatr Cogn Disord Extra	1	20-30	2011

Kazui H, Mori E, Hashimoto M, Ishikawa M, Hirono N, Takeda M	Effect of shunt operation on idiopathic normal pressure hydrocephalus patients in reducing caregiver burden: Evidence from SINPHONI	Dement Geriatr Cogn Disord	3	363-70	2011
Yoshida T, Kazui H, Tokunaga H, Kitayama Y, Kubo Y, Kimura N, Morihara T, Shimosegawa E, Hatazawa J, Takeda M	Protein synthesis in the posterior cingulate cortex in Alzheimer's disease	Psychogeriatrics	11	40-5	2011
数井裕光、武田雅俊	意味認知症 緩徐進行性高次脳機能障害の病態	BRAIN and NERVE	63	1047-1055	2011
杉山博通、数井裕光、武田雅俊	Treatable dementia - 正 常圧水頭症、慢性硬膜下血腫、薬剤性認知症の診断と治療 -	綜合臨床	60	1869-1874	2011
数井裕光、武田雅俊	認知症はどのようにして診断されるか	日本認知症ケア学会誌	10	114-121	2011
山本大介、数井裕光、武田雅俊	Wechsler Adult Intelligence Scale-III (WAIS-III)	日本臨床	69 巻 増刊号 8:	403-407	2011
数井裕光、武田雅俊	特集 2 特発性正常圧水頭症 iNPH 診療の Next Step iNPH に対するシャント術の介護負担への効果	脳 21	14	150-153	2011
野村慶子、数井裕光、武田雅俊	認知症の神経心理学 認知症における記憶障害	老年精神医学雑誌	22	1233-1240	2011
数井裕光	認知症診療における地域連携パスの可能性	Nursing Business	5	1004-1005	2011
数井裕光、吉山次、武田雅俊	精神科・わたしの診療手続 正常圧水頭症	臨床精神医学 第 40 巻増刊号	印刷中		2012